

秋期のいちご栽培におけるアザミウマ類の被害軽減対策の検討

1. 成果の要約

いちご栽培において、定植前の灌注剤（モベントフロアブル、ベリマーク SC）処理とククメリスカブリダニ放飼を組み合わせることで、アザミウマ類の密度を低く抑えることができ、秋期における果実への被害を軽減できることが明らかとなった。

2. キーワード

いちご、アザミウマ類、灌注剤、ククメリスカブリダニ、秋期

3. 試験のねらい

いちご栽培において、アザミウマ類は果実表面を加害し商品価値の低下を招く重要害虫である。従来、アザミウマ類による被害は主に春期に問題となっていたが、近年は作型の早期化や気候の温暖化の影響により、単価の高い秋期の被害が増加している。そこで、秋期におけるいちごのアザミウマ類による被害を軽減するため、現場で導入しやすい防除技術を確立する。

4. 試験方法

- (1) 場内のガラス温室（10m×5.2m）3棟で試験を実施した。品種は‘とちあいか’を用い、夜冷処理苗を令和4年9月5日に定植した（180株/棟）。
- (2) 処理区として、[灌注剤+ククメリス] [ククメリスのみ] [無処理] の3区を設けた。[灌注剤+ククメリス] 区には、モベントフロアブル（500倍）及びベリマーク SC（1000倍）を定植前（9月5日）に株あたり50mlを灌注した。[灌注+ククメリス] [ククメリスのみ] の両区には、ククメリスカブリダニ（「ククメリス」アリストライフサイエンス株式会社製）を定植1か月後（10月5日）に株あたり100頭を放飼した。また、全ての区にヒラズハナアザミウマ雌成虫を7日間隔で3回（10月13日、20日、27日）、株あたり1頭を放飼した。試験期間中は農薬の使用は控えたが、11月18日にうどんこ病及びアブラムシ類対策として、フルピカフロアブル（2000倍）及びチェス顆粒水和剤（5000倍）を散布した。
- (3) 調査は、10月19日から約7日間隔で、各区30花（10花/畝）を採取し、70%エタノールに浸漬後洗い出して、実体顕微鏡を用いてアザミウマ類及びククメリスカブリダニを計数した。なお、11月10日、17日は開花数減少のため各区15花の調査とした。また、11月4日から約7日間隔で、各区60幼果（20幼果/畝）についてアザミウマ類による被害（幼果の表面積に対する被害面積の割合）を程度別に以下の4段階に区分して調査した。

被害程度指数 0(無)：0%、1(軽)：1~20%、2(中)：21~60%、3(甚)：61~100%

[被害度] = ((1×被害度軽果数)+(2×被害度中果数)+(3×被害度甚果数)) / (調査株数×3) × 100

5. 試験結果および考察

- (1) アザミウマ類の発生推移を比較すると、[無処理] 区で11月上旬に幼虫数が10花あたり24頭となり急激な増加が認められたのに対し、[灌注+ククメリス] 区及び[ククメリスのみ] 区では10頭前後と、増加が緩やかであった（図-1）。また、その後も両区ともにアザミウマ類の密度は低く抑えられた（図-1）。
- (2) ククメリスカブリダニの発生推移は、[灌注+ククメリス] 区及び[ククメリスのみ] 区ともに放飼14日後（10月19日）には10花あたり35頭前後であり、定着していることが確認された（図-2）。また、11月上中旬にアザミウマ類が増加したが（図-1）、その後の11月中下旬にククメリスカブリダニの増加が認められた（図-2）。
- (3) アザミウマ類による果実の被害は、[無処理] 区では調査期間を通して3区の中で最も被害度が大きく、11月下旬には52.2となった（図-3）。一方、[灌注+ククメリス] 区と[ククメリスのみ] 区の被害度を比較すると、[灌注+ククメリス] 区の方が低いことが確認された（図-3）。

（担当者 研究開発部 病理昆虫研究室 若樹睦子*）

*現芳賀農業振興事務所

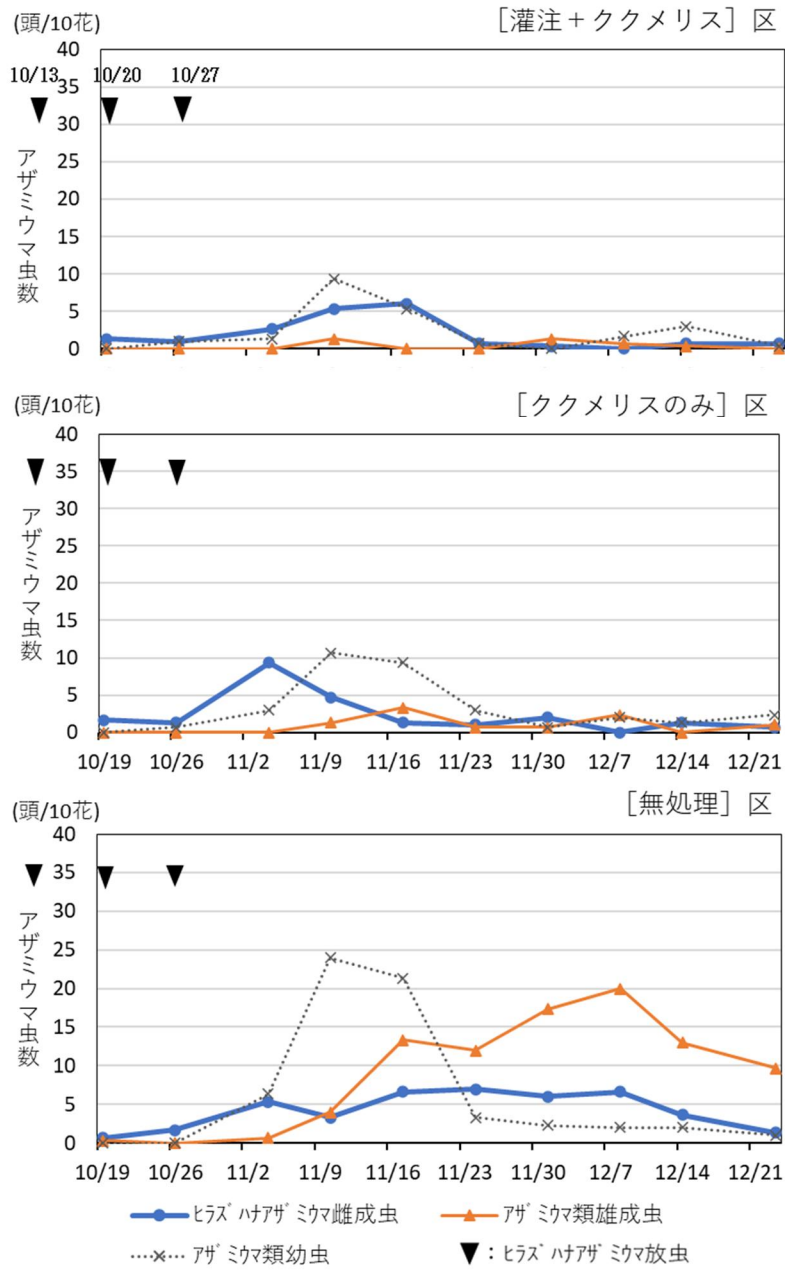


図-1 アザミウマ類の発生推移

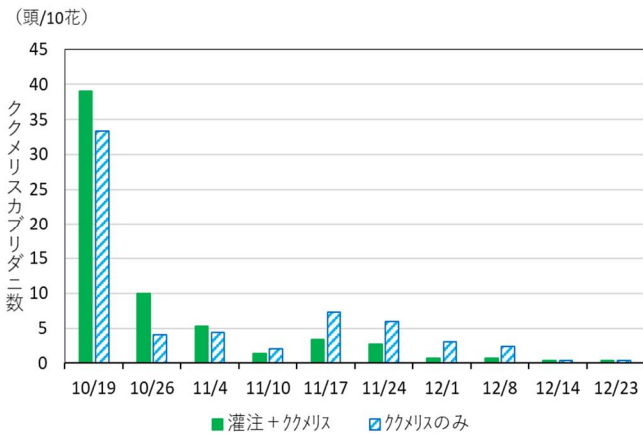


図-2 ククメリスカブリダニの発生推移

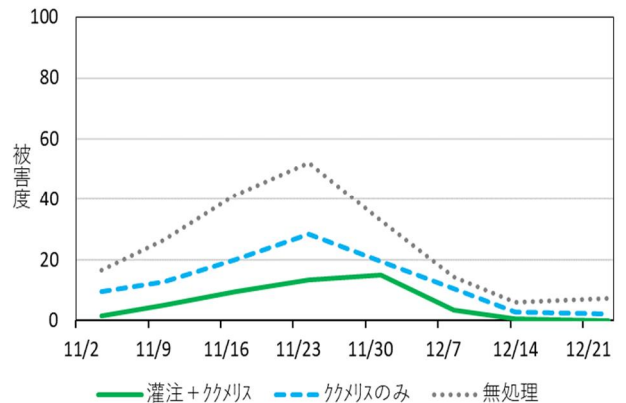


図-3 アザミウマ類による果実の被害度